

- (13) 前掲(注1)に同。P 318
- (14) 安宅切の本文に拠る。
- (15) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一五卷「平成2年 講談社」P 345
- (16) 古谷稔氏「藤原伊房」(東京国立博物館編『ミュージアム』一六九号「昭和40年 美術出版社」)
- (17) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一四卷「平成2年 講談社」P 351
- (18) 小松茂美氏監修『日本名跡叢刊』83「昭和59年 講談社」P 79
- (19) 「囁」を検すると、『康熙字典』には、安宅切・卷子本・戊辰切・葦手本に酷似した字体が存する。しかし、『康熙字典』では旁の部のの上(右)は「刀」で、安宅切・卷子本・戊辰切・葦手本のごとき「刃」とは異なる。安宅切等の字体は、当時、特異であったといえるのではなからうか。

第四節 戊辰切の位置

一

戊辰切は一橋徳川家の旧藏品である。もとは卷子本二巻で、分断前の戊辰切は、「すでに切り取られていた一三行をのぞいて、すべて欠紙欠行なしの、完本（上下二巻本）であつた^①」が、昭和三年（一九二八）に切断され、「各題」ごとの断簡となつて分散した^②。昭和三年の干支が戊辰であつたことに因んで戊辰切と称されている。

料紙は「上下巻ともに、同一装飾技巧によつて統一^③」されている。一面に雲母砂子と金銀の切箔が撒かれ、さらに、金銀砂子の霞引が施された美術的なもので、天地には薄墨の界が一条ずつ引かれている。

書写者は、藤原伊行（生年未詳——一二二以後）であると伝称されてきたが、巻上と巻下は明らかに別の手に成る。巻上が藤原伊行、巻下がその父にあたる藤原定信（一〇八八——一五五四以後）、すなわち、定信・伊行親子によるとする説もある^④。が、「下巻を親が書写し、子が上巻を書写する例は、当時の常識では、尋常ではなく、下巻は、定信の筆跡と酷似した書を書いた人物を想定する考えもある^⑤」。

堀部正二氏は平安時代書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本を、主に、本文の近似関係から、

- (1) 御物傳行成筆粘葉装本の系統に近きもの：粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切
- (2) 關戸家藏傳行成筆本（源兼行筆）の系統に近きもの：雲紙本・関戸本・卷子本・葦手本
- (3) いづれとも判定つかず夫々に特異の本文を有して雑類とも稱すべきもの

に三大別され、戊辰切を、「(1)・(2)両者の特徴を混有して別系をなせる類」として、(3)に分類された^⑥。

また、「知り得た百三十餘首についてみるに上巻は傳世尊寺行尹筆本に一致する所多く、下巻は關戸家本系統に近い所、粘葉装本系統と一致する所と相半ばしてゐるやうである」と述べられた。

今回、分断以前の原姿に近い状態の戊辰切の複製本⁽⁸⁾、及び堀部・久曾神両氏のご論に扱われなかった若干の資料を調査したことから、改めて平安時代書写とされる諸伝本における戊辰切の位置について考察を行った。本節ではその考察結果について述べる。

二

戊辰切の詩歌句の所収状況について分断以前の複製本(昭和三年 尚古会、及び『古筆学大成』⁽⁹⁾)に拠り述べる。
はじめに複製本について記す。

卷子本。卷上・下、二軸。

複製本に収められている詩歌句を詩歌番号順に排列し直すと次の通りとなる。

1 ~ 16⁽¹⁰⁾・18 ~ 73・78・81 ~ 533・535 ~ 602・604 ~ 677・679 ~ 796・796の次・798 ~ 804

詩歌番号順としたため、「18 ~ 73」の次に「78」を挙げたが、複製本では、73の次行には81が排列されており、その位置は74 ~ 80が存在しない(78については後述する)。この部分に関して、春名好重氏は、「うぐひすのこゑなかりせばゆきゝえぬやまざといかてはるをしまし」、(霞)の秀句・和歌、(雨)の(或垂花下、潜増墨子之悲、時舞鬢間、暗動潘郎之思)までの十三行は分割する以前に既に切り取られていた⁽¹¹⁾とされた。春名氏、御指摘の「うぐひすの」歌は74、「或垂花下」句は80に該当する。

複製本によれば、一首二行書きの73の一行目に紙継ぎ、73の二行目と次行の81の間に切断の跡かと思われる線がみられ、料紙からも73と81は別紙であることが知られる。また、74の一首二葉は断簡として『古筆学大成』に所収されており、この点からも、この部分は、昭和三年(一九二八)の分断以前に既に切り取られていたことが考えられる。

ただし、78については、8の次(9の前の位置)に移動している。8・78・「早春」(題)・9・10・11・12・13・14・15・

16の一〇首(一六行)は一紙内で、78の前後に切り継ぎの跡が見当たらないことから、8の次(9の前の位置)が78の本来の位置とみてよからう。

従って、75・76・77・79・80の五首は、昭和三年の分断以前に既に散逸していたとみられる。

555・630¹³は重出しており(555は81と82の間にも存し、630は16と18の間(17の位置)にも存する)、結果、今回、調査し得た詩歌句は、複製本所収の、重出詩歌句二首(555・630)を含む七九六首、及び『古筆学大成』所収の断簡一首(74)で、総計七九七首となる。

三

戊辰切の所在不明の五首(75・76・77・79・80)については対象外とし、詩歌句の有無、排列の面から戊辰切と諸伝本との関係について考察を行った結果について述べる。

まず、詩歌句の有無に関する考察結果について述べる。

調査し得た平安時代の書写とされる諸伝本の詩歌句を集成すると八一五首に上る。そのうち、いずれかの伝本に存しない詩歌句は次の九八首である(ここでは断簡等、切り取られたもの、及びその可能性のあるものについては除外する)。

17	42	82	90	91	92	107	109	115	120	178	194	215	225	237	246	249	257	268	271	313	321	322	323	330
337	344	の次	347	348	354	363	369	376	380	407	422	434	434	434	449	459	468	472	476	482	489	507	518	534
535	542	547	549	551	556	561	564	584	596	598	601	603	615	617	618	621	629	636	652	657	663	677	678	699
701	703	712	714	729	735	736	738	739	740	741	742	743	744	745	756	757	760	784	785	796	797	803	の次	804

戊辰切と諸伝本との関係をみるため、右のうち、脱落または追補である可能性の高い、いずれかの伝本一本のみが他本と異なる場合を除くと次のごとく二六首となる。詩歌番号を挙げ、詩歌句の有無を「有」「無」とし、諸伝本の略号を括弧内に

示す。

- ① 17 有(雲・関・粘・伊・久・唐2・山・葦) 無(戊・卷)
- ② 42 有(戊・粘・伊・久・卷・下・山・多・葦) 無(雲・関)
- ③ 215 有(戊・粘・伊・久・山・多) 無(雲・関・卷・葦)
- ④ 268 有(戊・粘・伊・久・卷・山・葦) 無(雲・関)
- ⑤ 313 有(戊・雲・粘・伊・久・山・葦) 無(関・卷・和1)
- ⑥ 321 有(戊・行大・粘・伊・久・唐2・卷・山・多・葦) 無(雲・関)
- ⑦ 322 有(戊・行大・雲・関・久・卷・和1・山・多・葦) 無(粘・伊)
- ⑧ 354 有(戊・粘・伊・久・山) 無(雲・関・卷・葦)
- ⑨ 380 有(戊・粘・伊・久・卷・山・葦) 無(雲・関)
- ⑩ 407 有(戊・雲・関・粘・法・伊・久・益・山・葦) 無(卷・太)
- ⑪ 422 の次有(益・山) 無(戊・雲・関・粘・伊・久・卷・下・葦)
- ⑫ 434 有(戊・雲・関・粘・久・卷・山・葦) 無(伊・太・大内)
- ⑬ 434 の次有(伊・久₁₄・太・大内・山) 無(戊・雲・関・粘・卷・葦)
- ⑭ 449 有(戊・粘・近・伊・久・卷・太・山・多・葦) 無(雲・関)
- ⑮ 534 有(粘・近・伊・久₁₅・卷・太・下・山) 無(戊・雲・関・葦)
- ⑯ 535 有(戊・関・粘・近・法・伊・久・太・下・山・葦) 無(雲・卷)
- ⑰ 564 有(戊・粘・近・伊・久・卷・山・多・葦) 無(雲・関)
- ⑱ 603 有(粘・近・伊・久・大内・山) 無(戊・雲・関・卷・葦)

19 617有(戊・雲・関・粘・法・伊・久・唐1・下・山・葦) 無(安・卷)

20 621有(戊・雲・関・粘・伊・久・山・葦) 無(安・卷)

21 652の次有(安・卷・定大) 無(戊・雲・関・粘・近・伊・久・益・山・葦)

22 712有(戊・粘・近・伊・久・安・卷・山・葦) 無(雲・関)

23 714有(戊・粘・近・伊・久・安・卷・山・葦) 無(雲・関)

24 729有(戊・粘・近・伊・久・安・卷・太・山・葦) 無(雲・関)

25 784有(戊・粘・近・伊・久・安・卷・太・益・山・葦) 無(雲・関)

26 797有(粘・近・伊・久・益・山) 無(戊・雲・関・安・卷・太・葦)

このうち、粘葉本類とも雲紙本類とも分ち得ない一〇首(①⑤⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑)を除外すると、戊辰切は、粘葉本類とは一二首(②③④⑥⑧⑨⑭⑰⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕)、雲紙本類とは四首(⑦⑮⑱㉖)が一致し、後者の四首のうち、三首(⑮⑱㉖)は戊辰切・雲紙本類に無いということが知られる。

また、右のうちの①17については、既述のように、戊辰切には無く、そこに重複歌(630)が位置するが、卷子本も、その位置に630「見度者櫻柳乎古支交天郷處春乃錦奈梨計類」が存する。

なお、他本にみられるが戊辰切にはない詩歌句は、右の二六首のうち、七首(①⑪⑬⑮⑱㉒㉖)であり、その他には八首(92の次・323の次・344の次・376の次・678・735の次・736の次・803の次)がある。この計一五首のうち、四首(17・534・603・797)を除いた一一首は、全て「後人の加筆」¹⁶⁾であると思われる。従って、戊辰切は諸伝本中、比較的欠落の少ない伝本であるといえる。

次に、排列についても、「詩歌句の有無」に関する考察で行ったと同様、ある伝本の排列が他本の排列と異なる箇所(三二一か所)のうち、一本のみが他本と異なる場合を除外すると次の六項目となる。諸伝本間において排列に異同がある所の詩歌

番号を挙げ、諸伝本の略号を括弧内に示す。

①◇110・111(戊・雲・関・粘・伊・久・卷・山)◇111・110(唐2・葦)

②◇137〜143・133〜136〔卷上・春部〕[躑躅]・[款冬]・[藤]〔戊・雲・関・卷・山・葦〕◇133〜143〔卷上・春部〕[藤]・[躑躅]・

[款冬]〔粘・伊〕

③◇201・202(戊・粘・伊・久・卷・山・葦)◇202・201(雲・関)

④◇273・272(戊・雲・関・久・唐2・卷・山・葦)◇272・273(粘・伊・多)

⑤◇309・308(戊・雲・関・久・山・葦)◇308・309(粘・伊)◇308無(卷)

⑥◇312・313(戊・粘・伊・久・山)◇313・312(雲・葦)◇313無(関・卷・和1)

戊辰切は粘葉本類とも同排列である(③⑥)が、卷上・春部卷末の三詩歌群が雲紙本類と同じく「躑躅」・「款冬」・「藤」の順(②)で、この他にも戊辰切は雲紙本類と同排列である箇所が二か所みられる(④⑤)。

以上、詩歌句の有無について検討した結果、粘葉本類とも雲紙本類とも分ち得ない一〇首を除外すると、戊辰切は粘葉本類とは二一首、雲紙本類とは四首が一致していることが確認された。それにより、粘葉本・雲紙本両類の要素を包含しているが、どちらかといえば粘葉本類よりであるといえる。が、戊辰切には、534・603・797の三首が雲紙本類と同様に無く、また、排列の面では、両類の形態を特徴づけているともいえる、卷上・春部卷末の三詩歌群が雲紙本類と同じく、「躑躅」・「款冬」・「藤」の順であった。加えて、戊辰切は卷子本と重複歌(630)を共有する等、雲紙本類の要素が各種みられることも否定はできない。

四

個々の本文を考察した結果について述べる。

戊辰切と諸伝本との本文関係をみるために、和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全本文に亘って行った。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

その結果が次の【諸伝本間の本文異同調査表】であり、斜線の左は和歌、右は漢詩を示し、上と右に記した略号の結ばれた欄をそれぞれ三段に分け、上段にはその二本間における対照箇所数を、中段には同文箇所数を、下段にはその対照箇所数に対する同文箇所数の割合を％で表した。

同表によると、戊辰切と諸伝本との本文関係の概略については、近い順に、漢詩は、粘葉本（八五・九％）、伊予切（八五・六％）、近衛本（八四・七％）が挙げられる。いずれも粘葉本類である。和歌は雲紙本類の葦手本（七三・七％）がある。また、久松切（七一・〇％）もある。

次に、戊辰切と、漢詩において同文率の高い粘葉本類との同文例を挙げる。戊辰切・粘葉本類の本文の下には諸伝本との異同を示し、括弧内には略号を示す。

- | | |
|----------------|--------------------|
| ① 63号 (戊・粘・伊) | ナシ(雲・関・久・卷・益・山・葦) |
| ② 63号 (戊・粘・伊) | ナシ(雲・関・久・卷・益・山・葦) |
| ③ 170号 (戊・粘・伊) | きかすあらふる(雲・関・久・山・葦) |
| | 不聞荒振(卷) |
| | きかすあふる(和1) |
| ④ 351号 (戊・粘・伊) | つきよよみ(雲・関・久・卷・山・葦) |
| ⑤ 381号 (戊・粘・伊) | ここにわか(雲・関・久・卷・山・葦) |

【諸伝本間の本文異同調査表】

葦手本	戊辰切	山城切	卷子本	久松切	伊予切	法輪寺切	近衛本	粘葉本	関戸本	雲紙本	歌 詩
283	279	278	282	277	283	36	103	281	284		雲紙本
201	184	192	212	208	191	26	67	184	265		
71.0	65.9	69.1	75.2	75.1	67.5	72.2	65.0	65.5	93.3		%
283	279	278	282	277	283	36	103	281		759	関戸本
202	182	197	211	205	189	28	65	182		705	
71.4	65.2	71.0	74.8	74.0	66.8	77.8	63.1	64.8		92.9	%
280	276	277	279	276	283	34	103		827	763	粘葉本
184	179	148	183	220	266	33	94		585	559	
65.7	64.9	53.4	65.6	79.7	94.0	97.1	91.3		70.7	73.3	%
102	103	101	103	105	105	32		459	450	414	近衛本
69	72	60	60	86	94	31		432	315	313	
67.6	69.9	59.4	58.3	81.9	89.5	96.9		94.1	70.0	75.6	%
36	36	35	36	36	36		131	152	149	146	法輪寺切
27	24	21	24	29	33		121	146	109	112	
75.0	66.7	60.0	66.7	80.6	91.7		92.4	96.1	73.2	76.7	%
282	278	279	281	278		152	459	842	827	763	伊予切
192	183	155	194	227		149	428	809	583	559	
68.1	65.8	55.6	69.0	81.7		98.0	93.2	96.1	70.5	73.3	%
276	272	273	275		835	151	459	835	822	754	久松切
208	193	175	201		686	125	379	699	585	556	
75.4	71.0	64.1	73.1		82.2	82.8	82.6	83.7	71.2	73.7	%
281	277	276		825	830	147	452	830	817	751	卷子本
200	187	170		526	530	86	285	532	455	430	
71.2	67.5	61.6		63.8	63.9	58.5	63.1	64.1	55.7	57.3	%
277	273		809	814	819	151	444	819	806	738	山城切
168	156		508	657	653	121	344	656	603	565	
60.6	57.1		62.8	80.7	79.7	80.1	77.5	80.1	74.8	76.6	%
278		813	824	829	834	149	458	834	823	755	戊辰切
205		669	561	696	714	122	388	716	609	583	
73.7		82.3	68.1	84.0	85.6	81.9	84.7	85.9	74.0	77.2	%
	813	796	807	812	817	145	439	817	807	740	葦手本
	682	598	515	625	631	121	350	633	561	534	
	83.9	75.1	63.8	77.0	77.2	83.4	79.7	77.5	69.5	72.2	%

⑥ 779 閑(戊・粘・近・法・伊)

閑(雲・閑・久・安・卷・太・益・山・葦)

戊辰切は粘葉本類の本文を有している。しかし、たとえば、右のうちの③・⑤の全文を挙げると以下の通りであり、傍線部のごとく、戊辰切には雲紙本類の本文が混じており、一首中、粘葉本・雲紙本両類の本文が混在しているといえる。

③ 170 ねきこともきかてあらふるかみたにもけふはなこしと人はいふなり

かみたにも(戊・雲・閑・葦)

かみたちも(粘・伊・久・卷・和1・山)

⑤ 381 みやこにはめつらしくみるはつゆきのよしの、山にふりやしぬらむ

めつらしくみる(戊・雲・閑・久・卷・山・葦)

めつらしとみる(粘・伊)

また、

○ 741 黄壤誰知我白頭徒憶君唯将老年淚一灑故人文

の傍線部は、戊辰切、及び雲紙本類の雲紙本・閑戸本の三本には「徒」とあり、戊辰切には雲紙本類とのみ同文である例も存する(粘葉本・伊予切・久松切・安宅切・卷子本・太田切は「獨」。近衛本は「猶」。山城切・多賀切は「獨^徒」)。

次に、和歌において戊辰切と同文率の高い葦手本・久松切との関係について述べる。

さきに、著者は、本書(前節)中、葦手本の本文性格について考察を行った際、葦手本は戊辰切と近い関係にあり、両本は書写の面においても密接な関係にあると指摘した。¹⁸⁾ また、葦手本は、粘葉本類の要素をも有するが、大きくは雲紙本類の系譜に連なると結論づけた。従って、特に漢詩においてやや粘葉本類より位置する戊辰切とはこの点において性格を異にする。

一方、久松切は戊辰切と撰者である公任の原撰本から変容した様相を呈するという点において共通性が認められる。¹⁹⁾ たとえば、

A 259 しらくもにはねうちかはしとふかりのかすさへ見ゆるあきのよの月

の傍線部は、戊辰切・久松切・散書切の三本は「かすさへ」、雲紙本・関戸本・粘葉本・伊予切・卷子本・下絵切・山城切・唐紙切・葦手本の九本は「かけさへ」とあり、平安時代は「かけさへ」が優勢であった。が、後代の『和漢朗詠集』諸伝本——たとえば、専修大学附属図書館蔵本・某氏蔵本（日本古典文学刊行会²¹）・天理大学附属天理図書館蔵本²²・墨流本（伝世尊寺行能筆²³）・陽明文庫蔵本（伝浄弁筆²⁴）には「かすさへ」とあり、その他も、著者のみる限りでは、「かけさへ」より「かすさへ」の方が圧倒的に多いものであった。²⁵

他文献『古今集』（巻四・秋上）諸伝本においても、「かけさへ」と「かすさへ」の両様あり、『和漢朗詠集』同様、平安時代は「かけさへ」の方が優勢であったと考えられる。（関戸本²⁶・筋切・元永本²⁷「かけさへ」）。が、やや時代が下り、了佐切『古今集』（藤原俊成筆²⁹）では「かすさへ」でその後は「かすさへ」が擡頭する。片桐洋一氏は陽明文庫蔵本（伝浄弁筆）『和漢朗詠集』の解説において陽明文庫蔵本（伝浄弁筆）は「鎌倉時代書写本の典型的な本文を伝えている」と述べられ、その一例に当該箇所「かすさへ」を挙げられ、『古今集』の「本文研究の結果がそのまま（和漢朗詠集）に現れている本文だと思ふ」とされた。片桐氏のご論のように『和漢朗詠集』の『古今集』との接触は想像に難くなく、戊辰切・久松切の「かすさへ」は、後代的様相を帯びた本文である可能性が高いと考えられる。

『古今和歌六帖』（第一・秋の月）にも「数さへ」として収められており、戊辰切・久松切の「かすさへ」は平安時代における諸伝本校訂の結果であると思われる。

また、

B 375 銀河沙漲三千界梅嶺花開一万株

の傍線部について戊辰切・久松切・卷子本・下絵切の四本は「界」、雲紙本・関戸本・粘葉本・伊予切の四本は「里」、山城切は「里」に傍書「界」がある。典拠は『白氏文集』巻五十三「雪中即事寄微之」。当該箇所、「里」。戊辰切の本文「界」を、柿村重松氏は「誤寫³¹」と説かれたが、川口久雄氏は『日本古典文学大系³²』の頭注において「私注以下諸本（三千界）に作る。

三千里とすると平面的。三千大千世界とすると深みがあります。わが国の人は後者に解したらしい」とされた。戊辰切の本文「界」が誤写であるのか、あるいは改訂された本文なのかという点については俄に断じがたいが、柿村氏が、「集註には三千界とある。謡曲空也にも三千界とあるから、當時は已に一般にかく變じて居たと見える」とされたことく、後世、戊辰切の本文「界」は流布したといえる。⁽³⁴⁾

葦手本・久松切を除き、諸伝本中、一本だけが戊辰切と同文である箇所を有するのは、卷子本(319「聲」・371「知」)・下絵切(183「いとゝはるけき」・341「晩」)・山城切(169「をきまさる覧」・753「末」)・多賀切(299「さきしより」・689「あはむとおもひし」)等、戊辰切・葦手本・久松切と同様、十二世紀書写と推定されている伝本群がある。

このうち、戊辰切と卷子本とは既述のように重複歌(630)を共有しており、卷子本と葦手本との関係も近い。⁽³⁵⁾ また、戊辰切と山城切とは形態的な面において類同的な関係にあり、山城切と十二世紀書写本との間にも共通異文例が認められること⁽³⁶⁾から、諸伝本間において接触が行われていたと推測される。

なお、諸伝本中、戊辰切にのみみられる和歌本文のうち、35「わかなつまむと」(『拾遺集』・『三十六人撰』⁽³⁸⁾・『人麿集』⁽³⁹⁾Ⅱ)・37「はるのゝに」(『貫之集』Ⅰ・Ⅱ)・155「夏のよは」(『古今集』・『新撰和歌』)等は、他文献参照による校訂が施されたものと思われる。

本文の下の注記においても、戊辰切では、唐人作の賦句にも作者名が注されており⁽⁴⁰⁾(63「賈高」・240「公乘憶」)、67「春江白」・397「傳温山居」等からも、戊辰切には、後世、盛んに行われるようになる研究的要素の萌しが見える。

以上、戊辰切の本文は、粘葉本・雲紙本兩類の中間的なところでありながら、やや粘葉本類よりも位置し、横の繋がりに、葦手本・久松切をはじめとする十二世紀書写と推定されている伝本群との連関性が認められた。また、戊辰切の本文・注記からは、他資料参照による校訂、または改訂が施されたかとも思われ、戊辰切は、広く諸伝本と共通要素を有しているということが明らかとなった。

五

戊辰切にみられる後代的変移の様相は題の用字からも看取される。

多くの伝本は、巻頭の内題の次に、部類名・題の一覧を有している。この一覧の、巻上・夏部の題「花橘」（はなたちばな）に着目すると、平安時代書写諸伝本においては、「花橘」が優勢であるが（雲紙本・関戸本・粘葉本・伊予切・山城切の諸伝本には「花橘」、戊辰切・久松切の二本には「盧橘」とある。

当題目の異同について、土井忠生氏は、「朗詠集は、上巻の範囲に就いて言へば、「花橘」と題するものと「盧橘」と題するものとの二つの系統があると、大體に於いて言へるやうで」⁽⁴¹⁾、「前者を花橘本、後者を盧橘本と呼んで、二類を立てることが出来る」とされた。分類上、重視すべき箇所である。また、同氏は、「室町時代は、その盧橘本が勢力を得た時期であった⁽⁴²⁾」という指摘もされた。戊辰切・久松切に、既に「盧橘」とあることから、「花橘」から「盧橘」に転化したその本源は、平安時代にまで遡ることが知られる。

また、本文中の題では、戊辰切では「雁^{付雁}」・「氷^{付春氷}」にみられる題「雁」・「氷」の下に、付録的に小字にて記されている付項目「帰雁」・「春氷」が独立した一題目として立項されている。

平安時代書写とされる諸伝本中、「帰雁」・「春氷」は山城切にも存し、「春氷」はその他、下絵切にもみられる。

この別項目として扱われている「帰雁」⁽⁴³⁾・「春氷」⁽⁴⁴⁾も、後代の諸伝本に（『和漢朗詠集私注』⁽⁴⁵⁾）にも及んでいる。それも題「盧橘」の場合と同断であり、戊辰切にみられる「後世的な要素」といえよう。

六

戊辰切には形態的な面においては雲紙本類の特徴が認められたが、本文はやや粘葉本類よりに位置しており、粘葉本類・雲紙本類の両要素が混在していた。横の関係においては、他本との接触、また、戊辰切同様、十二世紀書写と推定されてい

る伝本群との繋がりも認められた。とりわけ戊辰切と近い関係にあるのは葺手本である。しかし、葺手本は大きくは雲紙本類の系譜上に位置している。また、戊辰切が有する後代的要素は葺手本には見当たらなかった。⁽⁴⁷⁾

一方、久松切も、本書(第三章第七節)中、既述する通り、粘葉本類よりかと思われる本文を有するが、粘葉本・雲紙本両類のいずれにも属さず、また、形態的にも後代の変移の様相を帯びており、その点において戊辰切に類すると思われる。

集成本的・研究本文的性格を有する後代の諸伝本では、(1) 戊辰切が有する重複歌(630)の書き込み、または本文化がなされて、(2) 卷上・夏部の題「盧橘」が「花橘」の傍らに注されている、または「花橘」の位置に「盧橘」とある、(3) 元來、付項目であったはずの「帰雁」・「春氷」が本題目として独立している等、戊辰切に存する(平安時代書写本においては異質な)要素が摂取され、継承された跡が窺える。

後代の流布本の本文性格を探り、その源流を辿る上でも、平安時代という早い時点で、異本としての位置を占めていた戊辰切は諸伝本研究の上で貴重な資料といえる。

注

- (1) 小松茂美氏監修『日本名跡叢刊』84「平成元年 二玄社」P 81
- (2) サンリツ服部美術館学芸部編集・制作『サンリツ服部美術館所蔵名品聚』(平成7年サンリツ服部美術館) P 75
- (3) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一五巻「平成2年 講談社」P 348
- (4) 小松茂美氏編『日本書道辞典』(昭和62年 二玄社)「戊辰切」の項
- (5) 小松茂美氏は、上巻は「藤原伊行(子)」、下巻は「藤原定信(父)」の「筆なることは、動かしがたい事実となるであろう」とされた(前掲〔注3〕に同。P 345)。が、春名好重氏は「上巻の書風は伊行の『葺手下絵和漢朗詠抄』の書風に似ているが、同筆ではない。下巻の書風は定信の『金沢本万葉集』の書風に似ているが、同筆ではない」とされ(春名好重氏編著『古筆大辞典』(昭和54年 淡交

社」〔戊辰切〕の項、堀江知彦氏も、「上巻の筆者は藤原伊行」、「下巻のそれは父の定信と伝えられて」いるが、「にわかに断定は許されない」（堀江知彦氏著『古筆』〔平成5年 知道出版〕P102）とされた。

（6）前掲（注2）に同。なお、巻上・秋部「女郎花」の七行（女郎花）（題）・279・280・281）は、巻下と同筆とみられ、ここから「上下巻の筆者の関係の深さを物語っている」といえる（飯島春敬氏著『飯島春敬全集』第七巻「昭和61年 書藝文化新社」P232）。

（7）堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店〕P313

（8）宮内庁書陵部所蔵の複製本に拠った。

（9）小松茂美氏著『古筆学大成』第一五巻「平成2年 講談社」

（10）戊辰切には17の位置に他の和歌（630）が存する。

（11）記述中、「の次」とは『新編国歌大観』に無く、無番号。当該番号の詩歌句の次（ここでは796の次）に位置することを意味する。本表記により当該詩歌句の位置を示す。以下、同。

（12）春名好重氏編著『古筆大辞典』〔昭和54年 淡交社〕「戊辰切」の項

（13）17が無く17の位置に630が重複するのは、630と17の初句がともに「みわたせは」であることにより誤認されたことによると思われる（久曾神昇氏著『仮名古筆の内容的研究』〔昭和55年 ひたく書房〕P197）。

（14）久松切、後人による補筆。

（15）久松切、後人による補筆（片仮名）。

（16）山田孝雄氏校訂『岩波文庫 676 倭漢朗詠集』〔昭和14年 岩波書店〕P13～15

（17）山城切、「いふなり」を見せ消ちにして傍書。

（18）葦手本は奥書から藤原伊行（生年未詳―一二七二以後）の筆であることが知られる。戊辰切の書については、前掲（注5）に同。

（19）本書（第三章第七節）中、指摘した。

- (20) 中田武司氏解題『専修大学図書館蔵「古典籍影印叢刊和漢朗詠集二帖」』〔昭和56年 専修大学出版局〕
- (21) 日本古典文学会監修・編集『複製日本古典文学館和漢朗詠集』〔昭和50年 日本古典文学刊行会〕
- (22) 朽尾武氏著『貞和本和漢朗詠集』〔平成5年 臨川書店〕
- (23) 小松茂美氏監修『日本名跡叢刊』14〔平成2年 二玄社〕
- (24) 片桐洋一氏解説『陽明叢書 国書篇』第七輯〔昭和53年 思文閣出版〕
- (25) 国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる。調査し得た四六種のうち、「かすさへ」四一種。「かけさへ」一種。
- (26) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一卷〔平成元年 講談社〕
- (27) 久曾神昇氏著『古今集古筆資料集』〔平成2年 風間書房〕
- (28) 小松茂美氏監修『国宝元永本古今和歌集上』第一卷〔昭和55年 講談社〕
- (29) 小松茂美氏著『古筆学大成』第三卷〔平成元年 講談社〕
- (30) 前掲〔注24〕に同。
- (31) 柿村重松氏著『和漢朗詠集考證』〔昭和48年 藝林舎〕巻上 P.322
- (32) 川口久雄氏校注『日本古典文学大系 73』〔昭和44年 岩波書店〕 P.143
- (33) 柿村重松氏註『倭漢新撰朗詠集要解』〔昭和6年 目黒書店〕 P.57
- (34) 専修大学附属図書館蔵本・某氏蔵本（日本古典文学刊行会）・天理大学附属天理図書館蔵本・墨流本（伝世尊寺行能筆）・陽明文庫蔵本（伝浄弁筆）〔前掲〔注20〕〕〔注24〕に同〕は、当該箇所「界」また、調査し得た、国文学研究資料館蔵マイクロフィルム、四六種のうち、「界」四二種。「里」四種。
- (35) 本書〔第三章第六節〕中、指摘した。
- (36) 前掲〔注19〕に同。

- (37) 片桐洋一氏著『拾遺和歌集の研究(伝本・校本篇)』〔昭和55年 大学堂書店〕に拠った。
- (38) 久松潜一氏校『公任歌論集』第四九冊〔昭和26年 古典文庫〕に拠った。
- (39) 特に断りのない限り、私家集は『私家集大成』に、勅撰集・私撰集は『新編国歌大観』に拠った。
- (40) 三木雅博氏は、「平安後期の現存する最も古い『朗詠集』写本群に共通する本文形態」として、「原則として」『唐人の賦句のみには作者名が記されないとされた(同氏著『和漢朗詠集とその享受』〔平成7年 勉誠社〕P.145)。
- (41) 土井忠生氏著『吉利支丹文獻考』〔昭和38年 三省堂〕P.23、24
- (42) 京都大学文学部国語学国文学研究室編『慶長五年耶穌會板倭漢朗詠集』〔昭和39年 京都大学国文学会〕P.5
- (43) 山城切も「帰雁」、本題目。
- (44) 山城切・下絵切も「春水」、本題目。久松切、墨色の異なる筆で、「帰雁」・「春水」、本題目として補筆。
- (45) 山内潤三・木村晟・朽尾武氏編『和漢朗詠集私注』〔平成元年 新典社〕他。
- (46) 前掲(注7)に同。
- (47) 本書(第三章第三節)中、指摘した。

〈付記〉

戊辰切の複製本の閲覧に際し、宮内庁書陵部の方々にお世話になりました。記して御礼申し上げます。